

太 棹

第四百四十五號



昭和十六年三月廿六日
第三編 郵便 印刷

昭和十八年六月廿五日 印刷
昭和十八年六月廿八日 發行

(每月一個)
(廿五日發行)

太 棹 (第四百四十五號)

風流・金ふら・茶漬

(美地句)

去月屋

新橋二ノ八
電銀二〇八

御禮

東京臨時第一陸軍病院

太棹百四五號
五十冊

東京臨時第三陸軍病院 同三十冊

寄贈者 齋藤金太郎氏

右弊社の趣旨に賛同せられ傷痍將士慰安として御寄贈を賜り候段難有奉深謝候

太棹社

新名譽會員

岡野蘆鶴氏

今回本誌後援名譽會員に御申込みを辱うし難有御禮申上候

太棹社

席貸

並木俱樂部

浅草・雷門

電話浅草二二三五番

太棹 第四百十五號 目次

表紙・カツト……………齋藤清二郎

泣き・笑ひ・怒りなど……………紅雨莊主人(二)

古靱太夫の精進……………本山荻舟(五)

竹本劇とチヨボ……………安部 豊(六)

文樂通 信……………西尾福三郎(八)

三大會 三役……………(二二)

消息・會 報……………(二六)

全生園慰安會……………(南條 壽光)
徳島行き……………(宮内ほくら)

太棹社彙報……………(一九)

文樂座人形淨瑠璃……………(二四)

當座帖……………

編輯後記……………富取生





泣き・笑ひ・怒りなど

紅雨莊主人

◇義太夫は泣いて計りあるから厭だと云つた友達があつた。あまり藝事の分る方では無いが、念所を衝いて居る。
◇義太夫は憂ひの藝術である。二十分も聞くと吃度誰れか泣き出す。泣かぬ迄もアーマが悲劇の事が多いから祝儀の席などには向かず、悲劇を避けやうとすれば戀愛になり、それも大抵は悲戀か失戀で尙ほ困る。

◇七情のうち、悲しみが一番人に痛切で、訴へ易い。情を主とする義太夫で盛んに悲みを取入れる所以であらうが、少しく易きに就く厭ひがある。たゞ悲しみの内容も色々なので救はれる。親子とか孫とかを持ち出せば直ぐハンカチを用意して掛かる聴手は減少しつゝあるであらう。同じ親子でも囁戸のお弓とお鶴とは、哀れの極のやうで、も一つピンと來ず、日向島の娘やアいの深刻なものと比すべくもない。夫婦の情も身賣りのお軽などは哀れであり、宗五郎の雪の子別れも涙を

誘ふが、紙治のおさんや酒やお園などはちと御馳走過ぎぬか。鰻谷などは残忍變態で、噂に聞く説教強盜式惡趣味なもの、よく今時あんなものを平氣で語ると不思議に思ふ。吃などは男子にのみ分る職業的煩悶と、それにからむ夫婦の情とで、大分高級な部類に屬し、こんなものがもつと澤山欲しいものである。

◇泣く技術は流石に女が旨いが、多くは聞いて悲しくなく、どうかするとビイ／＼泣き過ぎる。尤も、悲しくなるのは泣き聲ではなく、聲と聲との間、根本的にはそこ迄持つて來る仕込みであらう。玄人のやる奥歯のあたりでキーといふ音を出すのは鼻つまりの擬音と思はれ、玄いやうで、其實あまりよくない趣味かと思はれる。はつとつめて、はアアと泣くのもあまりにお定食過ぎ、はアアと息で慄へて、更めてはアアと泣くのもそろ／＼定型になつて居るやうであり、ヨ

ストツプの青と赤とのやうに、規則正しく交代する泣き笑ひの型も聊か單調で智慧が無い。序乍ら例のウムフ、アアハの大時代の笑ひは實によく出來てゐると思ふが、今時これを本當に大きく笑へる太夫が何人有るであらうか。先代大隅の憂ひはどうかするとをかし、小鼻をひくつかせてゐるうち吃驚するやうな聲を出してキヤアと泣ひたりした。表現は奇抜だが情は激しく出て居る。寫實に計りも行くまいが、世話物など一般にもつと泣き方に工夫がありさうなものである。

◇泣きに比べると笑ひは六かしく見えるが、東京の見物は笑ふと手を叩く、時平の笑ひだの、義兵衛の笑ひだの、朝顔の笑ひだの、特別なものが有るとして、普通ならさう六かしさうにも見えぬのに、ラヂオの劇などでは大低腹の減つた笑ひ方をし、ことに女がひどいのは、息を吸ひ込まずに笑ひにかゝるから收支償はずポロが出るのであらう。何の芝居であつたか(安政奇聞夜嵐?)相手から思ひがけなく人殺しの圖星をさゝれ大きく笑つてごまかさうとして、それが笑ひにならず、泣聲のやうな半間なものになつて、却つて、腹が見えて了ふ復雜な笑ひを播磨屋がしたが、今に其妙技に感心して居る。播磨屋と云へば、二條城の清正で、淀川の述懐の場をいつも感心するが、唯一つ入れず、小さく船にせゝらぐ水の音だけで、あの長丁場を、イロも地合も無い詞一本槍であれだけに「語」れるもの、専門家の太夫にあるかと、いつかもラヂオ

で聞いて染々さう思つた事であつた。腹の薄い所をユリで幅をつけて大きく聞かす一流の技巧なども大したものである。
◇泣き、笑ひに比べると怒りは一番易いやうであるが、怒鳴るのは腹さへ強ければよいが、腹で慍つて居るのは少し調子が違ひさうである。併し、例へばむつとする質店の久作、城木屋の庄兵衛、むつとし乍ら笑つて了ふ七段目の平右衛門、三段目の鹽谷判官、これらも案外易しいのであらう。怒りの一種とも見える嫉妬の如きも、お三輪の焦燥、玉手の亂行、おさんやお絹のほんのりと狐色まで色々あるとして、いつか外國で見たオセロのぶる／＼慄ふやうな青白い嫉妬は淨瑠璃には無く、河庄の治兵衛、油屋の貢など、やり方によつては面白からうと思ふが、吉田屋の伊左衛門などは夕霧を蹴る程に強く嫉妬して居さうにもなく、鰻谷の八郎兵衛なども嫉妬だか未練だか分らぬ境地に見える。尤も八郎兵衛を本當の嫉妬にする爲めには仕込みがエゲツなくなるから風俗潰亂良俗破壊にならう。何れにするも、怒りは泣きと共に淨瑠璃に最も多く出て來るものであるが、泣きでは泣かされても、怒りで客を怒らす譯に行かず、客を怒らすとすれば、それは怒りではなくて、殘忍な舞臺上の言動などであらう。此點泣きや笑ひが其儘客の泣きや笑ひを誘發するのと比べて一寸別の世界のやうに思へる。そして、笑ひはもとより、泣きさへ客には快感が有るのに、怒りだけは結局不快な代物だと見えて、

客の本當に怒り出すやうな淨瑠璃も見當らぬやうである。

◇泣き笑ひ怒りの三つをちゃんぽんにやるよに所謂三人上戸があり、瀧だの布四だの之を見るが、實力が要り、骨の折れる割に、藝位はあまり高いと云へぬと思はれる。先年津太夫が大文字屋で三通りの泣きを聞かせたが、泣きの見本のやうで、これもあまり感心出来なかつた。義兵衛の笑ひでも云はゞど過ぎる。技巧本位になると怎うしてもこうなると見える。

◇泣き、笑ひ、怒りの三つは表面に顯はれた形であり、大低は複雑な氣持は概ねこれらを濃くしたり薄めたり取合はせたりして表現されてゐるやうに思はれる。従て七情の基礎と考へて大體差支あるまいが、問題は半端な泣き、笑ひ、怒り及其微妙なる應用による複雑なる情感を旨く出すと云ふ技巧上の難點と、其基礎になる七情の堀り下げとにある。夜通し蚊に食はれ乍ら同じ文句を繰返したなど、云ふ修業逸話は前者に屬するものであり、後者は普通「性根」といふやうな言葉で（それよりもつと深いやうに思ふが）言ひ表はされる「心境」の問題であつて、其人の感受性や教養次第淺くも深くもなるものである。これは簡單に「解釋」といふのと少し違ひ其「解釋」をもつと深く、自分の事として、表現の基礎として、具體的に感じ得る分析力、感受力の範疇に屬する。こゝになると太夫は太夫である前に「藝術家」でなくてはならぬ。



古靱太夫の精進

本山 荻舟

齒に衣を被せずにいふと、少くとも二十年前まで、古靱太夫が東京生れといふことで、東京の聽客に人氣のあつたほどには、どうしても買ひ兼ねた筆者である。

第一に筒が細い。それを擬裝する爲に、慘憺たる苦心の狀は見えるが、しかもその狀が見えるだけに、肩が張つて見てゐられず、自然藝風の織巧的になるのも、先代大隅などに憧憬した耳には、イヤミに思はれて物足らなかつた。たゞ震災前の有樂座で、『良辨杉』を聴いた時だけ、先玉藏のオットリと氣品のある良辨と渾然し、さすがによいとは感じたけれど、この語り物自體に重きを置かなかつた筆者としては、單にこの一番によつて、太夫の偉大を加へると思つてはゐなかつた。

更にもう一度齒に衣を被せずにいふと、當人の好んだと否とに拘らず、寧ろ當人は迷惑であつたらうと思ひながら、周圍からいはゆる蠱屑の引倒し的に、紋下問題が強調された時

太夫がたゞの男でなくて天性藝術家であり、深い教養を持ち其感受するものゝ表現技巧に沈潜する時、淨瑠璃は始めて深い味のものとなる。そして、完成するだけは完成してしまつたと見える義太節も、此方向へなら、まだ「發展の餘地が有りはせぬかと思はれるのであるが、右云ふやうな性質のものであるから、誰れにでも、勉強次第で出来るといふ譯のもので無く、天才の出現といふ事は、依然として藝道復興の基礎であるらしい。(一八、六、三)

營業課目

信用結婚・素行調査・保護尾行
監視・所在搜索・民刑訴訟ニ關スル證據蒐集

三 審 社

理事長 笠原善三

(東都五十義會常任書記)

事務所 東京都澁谷區並木町四

電話青山二〇五六番

自宅 東京都中野區上町二八

分には、勿論双方に親疎恩怨のあるわけではなく、まだ「やはり故人津太夫の方が、藝の巧緻を超越して、藝格の一枚上であることは争はれぬと信じてゐた。

その津太夫が物故して、他に比較するものがなくなつたから、急に古靱を認めたといふわけでも無くない。即ち少くとも二十年この方、不斷の精進によつて、古靱の藝が漸次向上し、いはゞ古靱の藝として、完成の域に達した徑路をも、承知してゐるつもりだが、それにしてもその精進に、最近著しく光彩の加はつたのには、一種の驚異をさへ感じてゐることを包み得ない。

津太夫は津太夫としての名實を完了して、白玉樓中に入つたものと信じてゐる。これを完了せしめた後、一致の衆望を負ふて、何等の不自然なく現地位に君臨した古靱が、最近の藝境・藝格に接し得る筆者の喜びは、筆者自身前述の心境を経て來たゞけに、一層甚深なものと同時に、古靱その人

に達しても、まことに藝神の攝理であつたと慶祝に堪へない
筆者が關西へ旅行する毎に、最も楽しみにするのは文樂座の
觀聽であるが、櫓下披露の興行には、幸ひ行きあはせて至藝
に滿悦した。太夫の淨瑠璃を至藝と感じたのは、その時以來
である。去年の秋も今年の春も、場席を豫約して置きながら
事故の爲機を得なかつたのは、今に恨事としてゐる所で勿論
東上の度には聽いてゐるが、東京で聽くのと文樂で聽くのと
は、事實同一味でないのだから、是非がないと思つてゐる。

それでゐながら極最近、ラジオで聽いた『天拜山』に、ア
ツと感歎したことを、告白せずにはゐられない。「菅原」の
中でも飛梅や天拜山なんか、大した太夫のを聽いたこともな
く、もとより重んじなどしなかつたのが、古靱のを聽いて頭
が下つた。勿論作にはなく藝にである。丞相悲憤の凄壯な
場面に、梅花を嘯んだ氣品の高さを、カッキリと活現したあ

竹本劇とチヨボ

安部 豊

演劇に出演の義太夫語りは、近年筋書本や番附には「竹本

は依然として「チヨボ語り」などと云はれて、普通の太夫よ
りも輕視されるような傾向がある。一と頃は文樂座内にも、
一旦「チヨボ語り」となつた者は復歸を許さぬといふ厳しい
掟が一種の不文律となつてゐた位で、ともかく此「チヨボ語
り」なるものは其社會に於て、別扱ひを受けるが如き慣習で
あつた。

「チヨボ語り」は事實それほど輕んじられ、且つ別扱ひま
でされる性質のものであらうか。これは其本質に就てよく檢
討する必要がある。いふまでもなく「チヨボ語り」は、舞臺に
於ける演劇の進展を促し、その精神を顯現し、演技者の藝術
に潤ひを與へる助演者であつて、其職責は極めて重く、また
尊いものである。名優が如何に獨特の演技をなさうとしても
「チヨボ語り」の藝が拙劣であつたら、その俳優の名演技は
盛上らずに平凡化し、看客の期待も半減されるであらう。極
言すればすぐれたる「チヨボ語り」あつて俳優の藝術は生彩
を放ち、「チヨボ語り」の價値は高まるといふことになる。
然しながら如何に「チヨボ語り」の藝が優れてゐても、藝術
的人格が備はらない者はその價値に乏しい。つまりは人格即
ち藝術で、これはどの部門にも大切な鐵則であることを信ず
る。先般物故した延壽太夫の清元による羽左衛門の演劇と、
他の太夫によるそれを考へても其差の大きいことが直に首肯
される如く、「チヨボ語り」も亦藝格が優れてゐれば、招か

たり、到底他の追従を許す藝境でない。

これに就いて考へるのは、近頃古靱が往々にして、新境開
拓の意だと思ふが、大した作でもない語り物、殊にいはゆる柄
にないものまで、上演することに對する是非の論に就いて、
ある。作品尊重第一の説に異議はなく、また不得意なもの
を採上ることの徒勞觀にも、不賛成はないが、大した新作の期
待し難い今日、現狀にあきたらずとして、各方面に試みる冒
険は、寧ろやはり精進の現れとして、一應認めてよいので
はないか。

その中からまた、いかな藝境を打開するかも測られぬ。こ
の點歌舞伎の菊五郎と共通することもしばしば述べた。十に
一、百に一の收穫でも、決して徒勞ではない。停滞が何より
も禁物である。修行は一生の意味も、こゝに徹して初めて活
きるのだと思ふ。(一八、六、一)

連中」の代名詞で誌るされるやうになつたが、日常の呼稱に

ずとも俳優の方から近寄つてくるにちがひない。今日の文樂
座太夫の劇場出演について見ても分る。古靱太夫を除く太夫
達は、決して優れた藝の持主ではないけれども、本格に近い
修行をして人格鍊成を重ねつゝある人々なるが故に、義太夫
物の出演に際しては俳優の方から辭を低うして寄つてくる有
様である。専門の「チヨボ語り」も斯様に、或はそれ以上に
地位を高めなければ、語り方も俳優の提唱によりて、俳優に
都合よき語り方をし、たいは義太夫節の本道を餘儀なく外
さなければならぬ破目に陥る。

故人歌右衛門は「チヨボ」に殊の外關心をもつた人で、見
舞に來た嚴太夫に向ひ、「チヨボ」の重要性を説いて、俳優
の無法な註文と妥協せず、義太夫節の本筋を語ることに腕
のある俳優なら必ず其本筋の語りについて動ける。要は俳優
太夫、三味線の意氣を合はせことだが、これは「チヨボ語り」
の最も注意すべき條件の一つであらう……と云つてゐたが、
流石に名言なるかなと敬服したものである。

近來「チヨボ語り」は東京だけでも相當にゐるが、果たし
て幾人が及第點に達するであらうか。鏡太夫、綾太夫などは所
謂「竹本連中」の錚々たる人たちと思ふが、他はいづれも期
待に乏しき面々のやうで、中には立派な語り手もゐるが聲が
わるくて榮えない者もある。團菊時代は別として、明治四十
一二年頃新富座に儼然と其名を誦はれた登太夫の如き「チヨ
ボ語り」は出現しないものか。文樂陣營に太夫の寂寥を見る
如く「チヨボ」陣營にも此感を一入深うするが、發憤する太
夫は出ないか。拔擢してその大成を望む俳優はないか。決戦
時局に於て、國民精神昂揚に重大な役目を有つ歌舞伎劇上演
が頻繁な昨今、「チヨボ語り」の任務は頗る重い。吾等は切
に優秀な「チヨボ語り」出現を望んでやまないものである。



文樂通信

西尾福三郎

五月

毎月の通し狂言一本立てを晝の部へ持つてくると云つた膳立てを、今月はぐつと趣向をかへて新舊取交ぜの四本立ての盛澤山、よりどりみとりのお好み本位と云はん許りの竝べ方なので、こちらもその氣になつて、晝の部では大隅、清二郎の辨上だけをきかせて貰つた。

御所櫻の三つ目は以前から大隅の柄に合つたものと自他共に許されてゐるらしいが、私の今日まできいた限りでは遺憾乍らさ程點を進上できるものではない。成程辨慶の柄はこの人の藝で表現出来得ても、かんじんのおわさやしのぶの繊細な感情に到つては一寸今日の大隅の持味では到り得ない。

それに人形陣の貧困が一そうこの狂言を味氣ないものにしてゐた。玉助の辨慶、龜松のおわさ、紋司のしのぶ、何れも

てゐて氣の毒な位である。

その道がに櫓下古鞍の岡崎だけは堂々二時間に亘る長帳場を綿密に克明に正量で賣つてゐる。尤もこれにインチャがあつては文樂の看板に毀がつく道理だが、願はくば一二の新作を犠牲にしても完全な原本のまゝをみせてはしかつた。

夜の部は岡崎だけをきいたが、當代岡崎を語り、且つ演じてこれ以上のものをこの人達以外に歌舞伎の舞臺に於ては無論のこと、恐らく斯界最高峰のものとして推すに躊躇しい。

演出上の成績は全く申し分無しとするも、元來私はこの岡崎の段の作意に餘り好感が持てないので、折角の名人藝揃ひ乍ら感銘を受けた度合ひは遙かに稀薄だつた事を否認ない。作品の構成や重量感から論ずるならば、岡崎の三分の一位のものにすぎない織太夫演ずる所の水漬く屍の方が眞實に人間を搏つ力をもつてゐるのではなからうか。これは勢力と云ふものを比較の外に於いた上の話であるが、岡崎の持つ眞實らしく装つた嘘と、そして、水漬く屍の持つギリ／＼結着の眞實との本質的な迫力の問題なのである。沼津の持つ牧歌的な情味は伊賀越全曲中の歴巻であるが、これを除外して通し狂言と云ふ稱呼はあり得ない譯だし、この退屈な岡崎の前に關所で竹藪を附加してみたところで大した意味をなさない。むしろその卑猥味に憎惡を感じる位が落ちである。岡崎と云ふ作品が餘り度々出ないのもかうした點に原因があるのであらう

粗末なもので一向感心しない。その上この頃では通例になつてしまつた辨慶の入り込みを省略する事が一層この作品の價値を毀損する事になるのではないか。

時間々々で攻め立てられるので止むなく行ふカットであるから、一應はお仕打の立場も諒とするが、他の芝居と違つて古典を正しく演ずる事以外の使命の無い文樂であるから、外の何を犠牲にしてもこの生命線だけは何とかして維持してほしいのである。人形や太夫の都合で端場を省いたり、又本文を矢鱈にカットしたりする事だけはなるべく遠慮して貰ひたい。そして文樂と云ふ所は院本の正味をみせるところと云ふ今日迄の一般人の常識を今後も持續するやう努力されたいマヤカシ物横行の世の中に、正真正銘の眞物を賣る店としてこそ唯一文樂の存在價値は百パーセントに發揮されるのである。夜のきりの堀川なぞこの爲にさん／＼なひどい目に會つ

扱て古鞍の語り口と云ひ、榮三の政右衛門、文五郎のお種、門造の幸兵衛と云ひ何れも結構な出来であつたが、私は特に清六の絃に讃辭を呈したい。殊に糸操り歌の條りなぞ身に迫るやうな雪の夜の哀寂感に溢れたものが感じられた。晝の部に野崎を出し夜の部に岡崎を出す、半二のこの二つの作品の類似性がマザ／＼と感じられて、幸兵衛夫婦とお袖、志津馬の扱ひが、そのまゝ久作夫婦、お光久松の幽霊である事が感得される。かうした竝べ方にも一考の餘地があらう。

この頃の文樂は御多分に洩れず興行成績は必ずしも悪くはないらしいが、三業一致を立前として成立つこの座に、特に目立つて感ずる事實は人形部面の貧困状態である。榮三文五郎の兩長老は近來頗る衰へを見せてきた事は覆ふべくもない現實である。玉藏は病休し、紋十郎一人依然として健在を示してはゐるが今が修業盛りで兩長老に追尾するにはまだ何やら足りぬものがある。續く玉助、光造、龜松、榮三郎、等々となると全く段が違つてしまつて前途遼遠の感のみ深い。幾度か叫ばれた文樂の危機はいよ／＼目前に迫つてゐる。しかも人形部面の地崩れから傾きかゝる状態にある事を認めざるを得ない。太夫三味線部面ではまだしも應急補充の道はあるが人形に限つて補強工作の施し様がないだけに、見てゐて心細さの限りである。この際だゞだゞ新進有望の四五の若手とそれに續く若冠の黒衣の人達に晝夜不斷の練磨を重ねて切望し

ておくのみである。

六月

恒例の東京出演を前にして、堂々上半期六ヶ月を打越した結びの意味で、今月の文樂の狂言立てはそれに恰はしい豪華番組として堪能させるに充分な盛り方を見せてゐる。

夜の部四つにそれ／＼一つか二つの極めつきの賣物を花飾りみたやうに添へて、これでもか／＼と云つた次き／＼の膽立てと些か食傷さへ感じさせる所、時節柄まことに勿體ない許りの大盤振舞ひの感がある。數少ない文樂の切り札を一度に出しきつたやうな所があつて、氣の小さい人間にはこんな一度に賣り物を並べ立てたら後が何うなるかと心配にさへなつてくる。

一番目に先代萩の御殿を呂大夫、次ぎを伊達大夫で出してゐるが、これには賣り物として文五郎が政岡を使つてゐる。例によつて動き澤山に、いゝ形を次ぎから次ぎへと見せて見物を喜ばせてゐるが、この場の政岡としてはかうした派手な行き方は前受けはするとも正常な解釋とは云はれない。その意味でこゝの賣り物は何と云つても仙糸の絃が一番と云ふ事になる。

次ぎは新作能「皇軍艦」に取材した赤道祭二場。お能の方を見てゐないから何とも云へないが、司令・艦長と云つたやうな役目から考へて、例の通り軍服姿の變な人形が舞臺へ現れるのかと思つてゐたら豈圖らんや上古風の防人姿だつたので助かつた。無論さうなると舟も軍艦ではなくて帆船であり謂はど阿部の比羅夫の南海遠征と云つたやうな形となり、それが詞章の中では大東亞戰爭を謳つてゐるのだから何となくチグハグな感を免れない。後ジテは紋十郎の赤道神が、前ジテの白毛を赤頭にかへて例によつての大あはれ、何れも小鍛冶以來の行き方だから又かと云つた氣持でそれ程の新味もないが、この頃の見物は結構これで大喜こびである。

さて次ぎは古靱の萬の葉子別れである。

正直に云つて期待が餘りに大きかつたせいもか豫期しただけの感銘は得られなかつた。是非もう一度き、直して委しい印象をかきたいが締切に急がれてその日を期し難いので今回はこの問題にふれる事を遠慮しておく。たゞ文五郎の保名が頗る珍らしく、且つ優れたものであり、猶それ以上に榮三の萬の葉が立派で、特に子別れの切々たる哀情表現に於ては或は床の古靱以上であるやうにさへ思はれる。從來のこの二人の人形の役所を取りかへた如き振り方だけでも尤に賣物の價值百パーセントである。

きりに壺坂が出て珍しく道八が大團平直傳のそれを全こかしにきかせる。何と云つても當興行中隨一の呼物である。呂大夫の弟子でかねてより注目されてゐた呂賀大夫が白井會長顔の哀れさは今一と息だつた。これは次の番の南部大夫に期待したい。絃は濱松小屋の相生を弾いた吉五郎がよかつた。人形は榮三郎が浅香一役でこれは上の部だが、朝顔は例によつて光造と龜松との代り番である。文五郎と紋十郎との間に格差がある如く、紋十郎とこの人達との間にも相當な段のある事が瞭然と分る。耳にて聞分ける淨りや絃と違つて、誰の目にも凡そは巧拙の見分けがつく人形だけに藝の深淺が即座に分ると云ふ事は怖ろしい。

要するに若手の練習曲に朝顔日記を取上げた事は世話物の乏しいこの頃としては好適な企畫ではあつたが、作品そのものに晝の部の全時間を傾倒するに足るだけの値價があつたか何うかと云ふ疑問だけが残る。猶先月の伊賀越の通しが、七月東京で上演されて、これが情報局の國民演劇の作品として参加する事に決定したさうだ。伊賀越の精神そのものは成程好箇の國民演劇テーマであらうが、岡崎までの扱ひ方をみると、これを國民演劇作品として首肯出来るか何うかこれにも可なりな疑問なきを得ない。

次ぎに晝の部の事を一寸かいておく。朝顔日記の通しは一寸興味を唆られたが、見終つて考へてみるとこれは既に今日のものではあり得ない事を痛感さへれた。卑俗低調な大衆作品と云ふ以外文章としても音曲としても何處と云つて取柄のない冗長な作品でしかない。宿屋の場だけが優れてゐる事が今更ら乍ら再認識されるが岡崎も濱松もつまらないし、宇治川と明石は筋を賣るだけの事だし、今度は笑樂の段が出てゐるので濱松の場で筋賣りをしてゐる所が珍らしいと云へば珍らしい。岡崎の場は全く忠臣藏九段目のアナで舞臺が逆勝手になつてゐるのも太十の妙心寺と共に珍の部で、それ以外に格別印象に残るものはない。宿屋は織大夫のをきいたが、朝

藝能報國

鶴澤觀西翁

第卅八回 東都五十義會三役

東
大關 杉本 花房氏
關脇 沼井 盛鶴氏
小結 田中 呑笑氏
西
大關 坂本あるを氏
關脇 志賀 文久氏
小結 國森 鳴門氏

【入賞】一等 美幸氏 二等 東雲氏 三等 文久氏
四等 峯樂氏 五等 喜光氏

京都 平安淨曲會三役

東
大關 高田タツミ氏
關脇 氏家 鶴峰氏
小結 杉浦 花住氏
西
大關 上野 鶴笑氏
關脇 白戸小富士氏
小結 福田 里昇氏

第拾五回 大日本素人淨瑠璃會三役

東
大關 野口 生樂氏
關脇 藤田 孝調氏
小結 加藤 重司氏
西
大關 澤田 金聲氏
關脇 和田 和十氏
小結 高田タツミ氏

【入賞】一等 喜玉氏 二等 金花氏 三等 樂水氏

採點表は本號編輯の間に合はず、不取致三役を本號に報道し、次號に右三大會の全採點を發表致します。

猛暑の候と相成御尊家御一統様益々御健全の程慶賀に存じま
す扱て此度私門弟呂賀太夫儀斗らすも松竹會長様の見出しに
預り松大夫の名を與へられ同人の光榮は勿論の事私としても
此上の仕合せ是ととも日頃御最良の御餘光と篤く御禮申上ま
す

御承知の通り本人はまだ前途遠達の未熟者今後の勵精を
こそ期待致す次第に御座ぬます何卒此上とも御鞭撻の程を
私より只管御願ひ申上奉ります

豊竹呂太夫

四方の皆様より數ならぬ身を御籠遇に預り厚く御禮申上
候此度恩師呂太夫様の仰せの通り有難くも松竹會長様より松
大夫の名を頂戴致すことは誠に過分の榮譽に之有候も未熟者
の面はゆき事にて汗顔の次第是と申すも日頃より何かと御教
示被下候ひし各御師匠様を初め先輩諸氏各御最良様方の篤き
御指導の賜と感銘罷在候
此機に一層我身に鞭打ち藝の道に極力精進して今日の榮を穢
さざるやう相勵み可申候まゝ末長く御ひろき御引廻しの程を
伏して御懇願申上候

呂賀太夫改メ

豊竹松太夫

敬白

國	報	能	藝
豊竹呂太夫	竹本住太夫	竹本大隅太夫	豊竹古靱太夫
竹本七五三太夫	竹本伊達太夫	竹本南部太夫	竹本織太夫

藝 能 報 國			
鶴澤清二郎	鶴澤重造	野澤吉五郎	野澤喜左衛門
乙 桐 女 竹 文 門 樂 造	桐竹紋十郎	竹澤團六	野澤吉三郎

藝 能 報 國			
竹本長尾太夫	豐竹司太夫	竹本濱太夫	竹本雛太夫
鶴澤寬治郎	鶴澤清六	豐澤廣助	豐澤仙糸

消息 會報

(七通信)

全生園の慰安會

南條 壽光

全生園にては毎年春季に患者慰安のため素人劇(患者中輕症なる諸氏がやる)が催はされます、本年も五月七八の兩日園内の特設劇場に於て左の四つの劇が上演されました。

一、御所五郎藏(五條坂出會の場)
一幕一場 二、佐々木高綱(高綱屋敷の場) 一幕一場 三、一の谷嫩軍記(熊谷陣屋の場) 一幕一場 四、一本刀土俵入(二幕五場 以上の中で熊谷陣屋のみが歌舞伎劇にて殊の外

ので網元の懇請に應じて出向いたのでしたが、特に淨瑠璃が好きな土地で常設劇場へ一杯這入りました。

面白い事はムリヨウ、フリヨウと云ふ語を職業柄非常に嫌ひますので、例へば酒屋の段の終り「千萬無量」と云ふ件りは「千萬大リヨウ」とやらねば納まらないのです。うづら君はこのことを豫ねて知つてゐて正しく「大リヨウ」とやつてのけました。

終演後は網元の家へ町長以下有志がズラリ竝んで吾々を十分に歡待していただき、寢床に這入つたのは午前二時を過ぎました。その時の御馳走は漁場だけに豊富なものです、御想像下さい、この際一寸うらやましからせ度いと思つて右の通り報告します。

十八日椿泊彦座語り物(寺子屋、ほくろ。酒屋、うづら。志渡寺、錦、沼津、操。陣屋、千晴。太十、掛合)

齋藤山生氏 東都聲義會々長齋藤山生氏は六月十四日、同會幹部山田壽

呼物で一ヶ月も前から期待されてゐたそうですが困つた事に此劇に出演する筈の盲人にして彈語りの太夫さんが開會間近かに突然老病にて倒れました、數ヶ月も前から稽古を重ねて來た呼物劇がやれなくなつたので、俳優諸氏は勿論園長始め上司の諸氏も落膽、思索にあまつた結果ある人の紹介で豊澤園市師の處へ頼んで來たのであります。そこで園市師と拙者が行く事になり本月七八の兩日出演致したのであります。が、何しろ全生園は國立にて本邦第一の療養所で規模の廣大施設の完備全く申分なく、敷地十三萬坪餘建物二百棟其延坪六千坪收容患者千四百名從業人員百名餘りの別世界的大世界であります。同園にては毎年秋季に農産物の展覽會を園内に於て開催し、近郷近在の農家から種々御自慢の農産物が出品されますが展覽會後其出品物は同園に寄附されるのが例となつてゐるので、其返禮代りに春季の慰安會に右縁古の方

飄、井上和風、堀ときわ、黒川叶、神馬里芳氏等を湯河原の別荘に招待して慰勞會を催はし、扇之助の絃で各自義太夫を語つて充分の歡をつくした。

■素玄澤曲研究會 第五十六回は五月卅日午後六時より官松亭にて開催野崎(悟堂、駒登大夫)阿漕(梅月、廣二)吃又(三司、團市)鳴戸(團雀清三)五十七回は鎮成會として六月廿七日午後零時半より會費一圓を以て山王山一山の茶屋にて開催。藤田徳太郎氏の江戸時代の發音、大西雅雄氏の演劇及義太夫と國語、豊澤團友氏の藝談の外、星野桔梗氏の大晏寺堤(絃綱助)竹本文昇の先代萩(絃猿昇)があつた。なほ五十八回は七、八月を合併して八月一日午後一時より木挽町朝日俱樂部に開催。先代(北斗、猿幸)關東アクトセントに就て(金田一春彦)太十(素昇、猿玉)

■十一面觀音講 神馬千代吉、黒川てつ、乾三千三、本城政治郎、麻田た

々を招待するもので、其數凡そ四千人を二班に分ち一日約二千位の人を招待するので(患者席と招待者席とは嚴重に區畫されてあります)劇場は相當の大建築であります。

患者の中に元俳優であつた人も居り係員の内に横田氏と云ふ七十餘歳になる園の功勞者にて頗る劇通が居られ此御兩人が脚本やら一切を指導されるので中々素人とは思はれぬ程上々の出来榮えてあります。

徳島行き

宮内 ほかろ

冠省 記事は貴社に一切お願ひすることとし茲にプログラムをお届け申します。十七日は一日休養して十八日には椿泊と云ふ漁師町へ参りました、徳島市から約一時間半の行程で、紀淡海峡に面し縣下第一の漁港です、偶々梅雨のため漁師諸君は皆休んでゐました

み、京極康次、淺井豊太郎、金子卯之助氏等は昨年より信州上山田國寶大師堂十一面觀音参拜の講を組織して多數の参加者があつたが、今回講員一同大太鼓を寄進して六月十八日参拜、これが奉納式を舉行した。

■三好會 蘇水氏歸京を歡迎、仲三郎、燕京兩絃と合併六月十二日駒形俱樂部にて開催。先代(八島)壺坂(喜三香)柳(巴好)忠六(壽々本)酒屋(知晟)十種香(蘇水)絃(仲三郎、燕京、三好)

■京阪合同會 東都五十義會に、無審査出演の爲め出京した吾孫子權、野口生樂兩氏と共に、栗原千鶴氏は中澤巴、星野桔梗、保谷紅司氏等の應援出演を求めて六月廿八、九兩日正午より文化俱樂部に於て親睦の合同義太夫會を開催。

■墨聲會有志 向島墨聲會有志島うつた、山田義昇、乾桔梗、高光吳光、太田共樂氏は今回五十義會にて三等に

入賞し西關脇に昇進した青森の志賀文
久氏を祝し、六月二十九日夜文化倶楽
部にて一夕の義太夫會を催はした。

【新京「合同會」】 新京市竹本喜美
太夫、豊澤竹尾連の「合同會」は六月
（日時會場書洩れ）開催。日吉（喜の
字）朝顔（藤川）新口（今野）忠四（喜
鳳）忠六（喜昇）菅四（竹枝）又助（稻
本）

【入賞記念淨瑠璃會】 大阪大日本
素人淨瑠璃會第十五回大會に於て入賞
し尙ほ團體賞の一位に推され、又京都
平安會にも入賞した光榮を記念し、磯
ナゴン、金山金花、宮川はじめ（以上
廣助連）福田あしべ、萩原得谷、八木
一蝶の諸氏主催となり前記兩會後援の
下に六月二十四日正午より道頓堀倶楽
部に於て入賞記念淨瑠璃會が催はされ
た。壺坂（松葉家）濱松（廣江）宿屋
（近江）三日太平記（琴風）十種香（廣
子）鯨屋（めがね）先代（老壽）岡崎
（一蝶）中將姫（光友）杵掛（あしべ）

天王寺村（花住）三代記（タツミ）
挨拶、先代（はじめ）菅四（金花）鯨
屋（ナゴン）長局（其笑）城木屋（眞
若）佐太村（柳平）合邦、帯屋（掛合）
絃（廣二、廣助、廣玉、庄次郎、友造
稻丸、新造）以上順不同。

【女義若女會】 會場東橋亭。（第六
十九回、六月一日）鳴戸（小素、素二）
野崎（素八、駒登久）辨慶（素次、清
三）新口（若好、巴住）太十（彌周、
三生）（七十回、六月十五日）柳（佳
世子、小政）鯨屋（猿春、三生）港町
（綾之助、清一）太十（素八、駒登久）酒
屋（住若、清一）（七十一回、七月一日）
【鶴澤絃平師】 鶴澤絃平師は竹本住
太夫師の仲介にて今回野澤吉彌師の門
下となり二代目野澤吉二郎を襲名する
こととなつたので、六月二十七日大森
「三芳」に於て絃平師連中一同並に東
都五十義會々長細川清氏出席の下に師
弟の盃を交はしたが、大阪日本因協會
にも復歸し追て披露會も開催する。

御禮

猛夏の折柄四方の御皆々様益々御
清祥に涉らせられまして此上もな
き喜びと存じ上奉ります。私儀
昨冬襲名披露之節は格別の御引立
を蒙り御蔭を承りまして身に餘る光
榮を重ねました事は偏に御最眞御
後援の賜と厚く御禮申上ます。
尙今回七月一日より文樂座引越興
行と致しまして御地新橋演舞場へ
御目見得開演中は倍舊の御引立御
愛顧を蒙り難有御禮申上ます。今
後とも何卒御鞭鞭の程を偏に御願
ひ申上ます。

野澤喜左衛門

太棹社報

◎本欄は大會又は新生の會を報道致します。
◎開催前月に詳報したものは開催後の記事を略し
ます。
◎持種の催ほしの外、前書を略します。
◎番組御送附なきもの、或は通信なきものは記載
洩れとなります、御諒承を乞ふ。（掲載順不同）
◎なほ見出しに二號活字を使用、特別掲載方御希
望の會は其旨御一報を乞ふ。

太棹社

乙女文樂 素義聯合會 人形淨瑠璃

六月九、十兩日日本橋俱樂部にて開催した乙女文樂人形淨
瑠璃之助會の大會の後引續き吉例の行事として同人形入素
義聯合會が十一日より三日間並木俱樂部に催はされ、四日目は
淨淨會の主催にて人形もそのまゝ同會場に於て一日開催し
た。

（十一日）「一部」市若初陣（淺路、綾之助）鯨屋（前吳光
新造、後、柳光、綾之助）鳴門（前、君光、良造。後、たか
ら、龍太郎）「二部」合邦（前、叶昇、後、桔梗。新造）紙
治（彌聲、扇之助）引窓（乃菊、綾之助）（十二日）「一部」
新口（六花、清一）寺子屋（前、其角、猿平。後、喜照、綾

婦人 素義 相生會（第二回）

人形 桐竹久子、清子、芳子、和恵、貞子、靜子、貴美子
千恵子、勝子、松枝、菊子、竹子、好子（以上順不同）

岡野芦鶴氏が主となつて深川、芳町等の婦人素義を一丸と
した「相生會」は第一回を茅場町宮松亭で催はしたが、第二
回は春季大會として六月二十日正午より飛行館にて賑々しく
開催した。

朝顔（深雪、はつ子。岩代、芦鶴。駒澤、新常盤、徳右衛
門、光玉、相玉、小和光）柳（愛香、播代）先代（一力、土
佐廣）鳴戸（新常盤、相玉）堀川（末廣、土佐廣）酒屋（は
つ子、相玉）白石（ゆき子、小津賀）十種香（光玉、小和光）
辨慶（昇華、仙十郎）合邦（福榮、猿喜知）太十（芦鶴、仙

十郎)先代(藤仲、團龍)大切白浪五人男(辨天小僧、芦鶴南郷、福榮、番頭、ゆき子。駄右衛門、あづま、小僧、小世根)

淨曲梅鉢會

黒川叶氏を會長とする淨曲梅鉢會は例年の通り六月二十五日午前十一日より並木俱樂部にて初夏大會を開催。

陣屋(熊谷、吳光。相模、叶。藤の方、義昇。軍次、以呂波。新造)寺子屋(叶、扇之助)白石(久松、新造)山名屋(芦鶴、仙十郎)沼津(以呂波、扇之助)合邦(小柳、新造)忠六(喜らく、勝助)堀川(登盛、猿昇)寺子屋(里芳、芳太郎)戀十(喜香、猿喜知)妙心寺(吳光、新造)岡崎(井筒、勝八)佐太村(義昇、和孝)堀川(叶昇、新造)壬生村(子太郎、和孝)忠六(都平、都大夫)紙治(桔梗、和孝)柳(都竹、猿清)大曼寺(うつろ、和孝)野崎(久作、叶、お光、桔梗。お染、義昇。久松、子太郎。母、吳光。猿藏、ツレ、扇之助)

東京素人 淨瑠璃 人形入大會

高瀬操、緒方千晴、蛭子錦、宮内ほくら氏等は徳島に遠征

(第一部)彌作(あるを、松四郎)近八(昇、猿平)布四(吞笑、絃平)野崎(越巴、和歌吉)大曼寺(桔梗、綱助)白石(操、道之助)寺子屋(松王、桔梗。玄蕃、盛鶴。戸浪、操。御台、若君、義昌。百姓、越巴。千代、平茶。源藏、あるを絃平)

豊竹小團司披露會

豊竹團司の門下豊竹團蝶は豊竹小團司と改め六月十四日午後一時より日本橋俱樂部にて左記番組に依りその披露會を開催した。

草履打(岩藤、猿春。尾上、駒龍。絃、津賀昇)長局(團司、三生)新口(文昇、猿昇)：挨拶(豊澤猿之助)：朝顔(彌周、三生)五斗(小團司、猿幸)大切壺坂(お里、文昇)絃、猿昇。澤市、彌周。絃、猿幸。觀世音、猿春。ツレ、駒龍。絃、津賀昇)

淨曲古本案内

太 棹(創刊號より百二十一號迄百十三冊。金十八圓)希望者は、本郷區丸山福山町十三、粹古堂伊藤敬治郎氏へ天狗雜誌(二百三十號より三百九十八號迄。百六十七冊、三冊不足は合本のありし爲めか)氏名在社。

し六月十四日より三日間同地温泉劇場にて例年の通り出征遣家族慰安の人形淨瑠璃大會を催ほした。

(初日)先代(千代菊、千代登)酒屋(うづら、松十郎)柳(とみ、近作)佐太村(ほくら、團市)陣屋(錦、團市)太十(千晴、團市)沼津(操、松十郎)大切千兩轆(掛合)(二日目)宿屋(千代菊、千代登)新口(うづら、松十郎)伊賀五(近作、松十郎)志渡寺(錦、團市)寺子屋(ほくら、團市)長局(操、松十郎)鮎屋(千晴、團市)大切忠九(掛合)(三日目)日吉(見崎、市左衛門)紙治(うづら、松十郎)十種香(とみ、近作)陣屋(ほくら、團市)合邦(錦、團市)御殿(千晴、團市)安達(操、松十郎)大切忠七(掛合)

中老會夏季大會

五月は會員田中吞笑氏的地盤横濱に出張して春季大會を開催した中老會は七月三日午前十一時より並木俱樂部にて夏季の大會を催ほした。

(第一部)陣屋(義昌、綱助)忠六(奇聲、和歌吉)壺坂前(春和、絃平)同奥(盛鶴、絃平)封印切(平茶、猿之助)新口(美峰、猿之助)太十(光秀、春和。十次郎、義昌。さつき、桔梗。初菊。操。みさを、昇。久吉、盛鶴。絃平)：

浄曲古本案内

新書社

元北浜 西村銀司

新書社

文樂座人形淨瑠璃

東京興行 (七月一日初日外題五日替り) 新橋演舞場

— 延日迄日四月八 —

大阪文樂座人形淨瑠璃の吉例東京興行は文字通り超満員、切符は全部賣り切れといふ好成绩を示し遂に八月四日迄日延べとなつた。なほ國民演劇として伊賀越が上演される事になつてゐた處、これは都合で中止となり、四の替りに「千本櫻」の通しを以て之に代へ國民演劇第二部(古典)に文樂座が初の参加をする事になつた。

▽第四回(十六日より二十日迄)

通し狂言「義經千本櫻」伏見稻荷の森の段(義經―七三太夫、靜御前―濱太夫、藤太―隅若太夫、辨慶―松島太夫、龜井―津磨太夫、駿河―千駒太夫、三絃綱造) 嵯峨庵室の段中(宮太夫、越名太夫、錦糸)後(相生太夫、吉五郎)権の木の段口(つばめ太夫、仙三郎)奥(大隅太夫、清二郎)小金吾討死の段(呂太夫、仙糸)すしやの段(豊竹古靱太夫、清六)道行初音旅(靜御前―伊達太夫、忠信―松

▽第五回(廿一日より廿五日迄)

本朝廿四孝(十種香より狐火まで)。思ぶ佛(新作)。御所櫻辨慶上使(辨慶上使)。双蝶々曲輪日記(引窓)。壺坂觀音靈驗記(澤市内より壺坂寺まで)

▽第六回(廿六日より卅日迄)

盲杖櫻雪社(三人座頭)。和田合戦女舞鶴(市若初陣)。近頃河原の達引(堀川猿廻し)。増補忠臣藏(本藏下邸)。關取千兩戰(猪名川内)

▽第七回(卅一日より八月四日迄)

假名手本忠臣藏(下馬先進物より祇園一力茶屋まで)進物。殿中。裏門。花籠。判官切腹。霞ヶ關。二つ玉。身賣。勘平切腹。祇園一力茶屋。

當座帳

- ▽平山平茶氏 中老會に入會。
- ▽川口子太郎氏 工場視察の爲め五月名古屋、伊勢地方へ旅行。
- ▽吾孫子櫓氏 大阪市南区難波新町二番丁二七番地へ移轉。電話南六七番。
- ▽高光吳光氏 本郷區向島須崎町一四二番地へ轉居。
- ▽傍島紀鳳氏 出雲と改名。
- ▽桐竹梅子 大日本淨曲協會國演會屬桐竹梅子は東金之丞と改名。
- ▽竹本七五三太夫 五月廿三日大阪和光寺に於て初代七五三太夫卅三回忌を誓む。
- ▽豊竹呂賀太夫 豊竹松太夫と改名。

訃報

伊藤爲吉氏 嘗て義太夫振與會を創立し、淨曲の向上を企劃すると共に淨曲精神武士道鼓吹に盡瘁せられし伊藤爲吉(苦樂)氏は大阪にて永眠、五月廿九日午後二時より三時迄本郷の協會にて告別式が行はれたが久保田萬太郎山田耕作氏の文壇を始め劇界よりは市川猿之助、同段四郎外三百餘名の焼香者あり、素義界より安藤光榮、原田越

巴の兩氏の顔も見えた。故人は伊藤道郎、千太是也、伊藤定亮、伊藤翁助氏など著名の藝術家を出してゐる。享年八十二。

編輯後記

▼本號は文樂研究の特輯として發行したいと思ひましたが、印刷所の混雑や紙の都合で止めました。御多忙中本山萩舟、安部豊氏の御寄稿を賜りました事を深謝致します。

▼紅雨莊主人氏から久々で御寄稿がゆりました、しかも一つは「師弟道」といふ長稿をいただきましたが、これは次號に掲載致します。

▼川口子太郎氏も愈々「端場の研究」を執筆、第一回分が届けられました。齋藤清二郎氏に挿繪をお願いして、これも次號から毎月連載致します。

▼内田三千三氏の女義短評「因會女子部と綾之助會」は本號に掲載する筈でありましたが、紙の都合でどうしても納まらず、次號にまはさせていただきます。また、同氏にお詫び致します。

▼會報の五月分はあまり古くなりまして、たので六月からのものを報告致しました。大連の「旭勝會天森の」さ、波會「紫會」翁會其他御通信を賜りました皆様の御諒承を願ひます。―富取生―

定		價	
一部金	五十錢	郵税一錢	
六月分金	三圓	郵税共	
一年分金	五圓	郵税共	

誌代は總て前金御拂込の事
 ▼なるべく振替に御送金の事
 ▼郵券代用一割増

昭和六年六月十五日印刷納本
 昭和六年六月十五日發行

東京都小石川區音羽町一ノ二
 編輯人 富取壽鹿
 發行人 富取壽鹿

東京都小石川區指ヶ谷附四
 印刷人 杵淵五郎
 印刷所 柏葉社
 東京二三八三

東京都小石川區音羽町一ノ二
 發行所 太棹社
 振替東京三一七八

昭和十六年三月廿八日
第三編 郵便物認可

昭和十八年六月廿五日 印刷納本
昭和十七年六月廿八日 發行

(毎月一回)
廿日發行

太極 (第百四十五號)

(定價五拾錢)

食慾増進
芳香美味

料理の味をよくする

チキンソース



東京チキンソース株式會社